



▲沿道の観客が見守る中、すずめ踊りの踊り手たちが華やかに舞いました

市政トピックス

3年ぶりのにぎわい
―仙台・青葉まつり―

5月14日・15日の2日間、定禅寺通や勾当台公園などを会場に、「仙台・青葉まつり」が3年ぶりに開催されました。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、一部の演目を中止したり、時間を短縮したりするなど、例年より規模を縮小し、感染対策を徹底して行われました。

初日の「宵まつり」では、定禅寺通で仙台すずめ踊りが披露され、約1400人の踊り手が色とりどりの衣装と扇子で、おはやしや掛け声に合わせて元気に舞いました。2日目の「本まつり」では、新型コロナウイルス感染症の収束を願い、本まつり巡行が行われました。鉄砲隊や甲冑姿の武者隊などによる武者行列が山鉾を先導。すずめ踊りに続き、豪華絢爛な山鉾が巡行しました。沿道は多くの人でにぎわいました。



▲子どもたちが自ら新たな遊びを考え、プレーリーダーと楽しんでいました

市政トピックス

子どもの遊び場の充実を目指して
―実証実験を開始しました―

5月20日から23日までの間、子どもの遊びの環境に関する実証実験「あ・そ・び・ば 仙台」が七北田公園で行われました。この実験は、利用者のニーズや遊び場の利用実態などを把握し、遊びの環境の充実に向けて検討を深めるために実施するものです。場所や季節などを変えながら、さまざまな遊び場を仮設し、アンケート調査などを行います。

期間中、会場には子どもたちが自由な発想で遊べるよう促すプレーリーダーが配置されたほか、さまざまな遊具や幼児が寝転ぶことができるエリアが用意され、多くの親子連れが訪れました。

市政トピックス

「仙台防災枠組」の
進ちょくに関する中
間評価を行います

子どもたちは、プレーリーダーと一緒に、カラーリボンを切って木材に巻き付けたり、どんぐりを好きな形に並べたりするなど、会場に準備された、さまざまな素材を使って、自由な発想で楽しんでいました。また、障害のある子どもと一緒に遊ぶことができる、背もたれの付いた回転遊具など、初めて見る遊具に夢中になって遊んでいる様子も見られました。来場した保護者からは「子どもが自分で遊び方を考えられるように工夫されていた」「小さい子どもが寝転びながら遊んだり、絵本を読んだりできる場所があつてよかった」といった感想が聞かれました。

市では今後も、季節ごとのテーマを設けながら、屋内施設も含め、12月まで実証実験を実施していく予定です(次回の開催は9ページ参照)。

市政トピックス

「女性・若者活躍推進会議」を開催しました

市では、女性や若者が抱える生きづらさや貧困などの実情を、民間団体へのヒアリングを通して把握し、必要な支援につなげることを目的に、郡市長を座長とする「女性・若者活躍推進会議」を設置しました。6月10日の初会合では、ひきこもりの女性の居場所づくりや、困難を抱えた子どもへの学習支援など、さまざまな活動を行う4団体が参加しました。

会議では、初めに各団体から活動内容などについて報告され、女性のひきこもりが気付かれにくくなっている現状や、子育て支援に関心のある母親の活躍の場の必要性などが挙げられました。また、その後の意見交換においては、関係機関の連携や支援のつなぎ方に関する課題認識などについて話し合いました。

女性・若者活躍推進会議は今後、令和5年3月までに2回開催を予定しています。会議を通じて得られた知見などを基に、新たな施策の検討等を行い、今後の支援の充実に努めていきます。

5「2030」が採択されました。世界的な防災の取り組み指針である仙台防災枠組では、災害による死者数や被災者数、経済的損失の減少など、2030年までに目指す7つの目標を設定。計画の折り返し時期を迎えるに当たり、世界各国で進ちょく状況についての評価が進められています。

市では、東北大学災害科学国際研究所と連携し、4月より目標の達成に向けた取り組みの検証を始めています。自治体独自で評価を行うのは世界でも例がない試み。仙台防災枠組の採択都市として、災害統計のモデルを示すことを目指します。

5月23日からインドネシアで開催された、第7回防災グローバルプラットフォーム会合の関連イベントに郡市長がオンラインで登壇。郡市長は、宮城県沖地震以降の施設の耐震化など、過去の災害の経験を教訓にした事前の備えの重要性を訴えるとともに、中間評価を実施することで防災の取り組みを加速化させることを報告しました。

市と東北大学では、引き続きデータ分析や課題の洗い出しなどを進め、令和5年3月に仙台で開催される世界防災フォーラムにおいて、評価結果を世界に発信します。

市政トピックス

自動車事故の危険性を再認識

6月8日に市内の自動車学校で、「シルバードライバー講習会」が開催されました。これは、高齢者が運転する自動車による重大事故が全国的に発生していることを受け、自身の運転能力や運転時の注意事項を再確認し、事故防止につなげることを目的としたものです。講習会は2回に分けて行われ、65歳以上の30人の方が参加しました。最初に、実車による安全運転度チェックを実施。一般道では、坂道での減速などを再確認したほか、自動車学校内では縦列駐車などを行い、同乗した指導員から運転の助言を受けました。その後、実際に発生した交通事故の映像を見て、事故につながる危険な状況などを再確認しました。参加者たちは、運転の基本を振り返り、安全運転への意識を新たにしました。

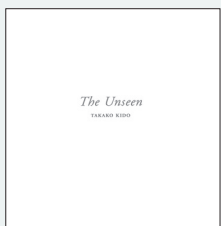


▲後方の確認の仕方など、指導員にアドバイスを受けながら車庫入れなどに取り組みました

3・11 震災文庫を
読む

東日本大震災を語り継ぐため市民図書館に設けた「3・11震災文庫」。所蔵する約1万冊からよりすぐりの本を「紹介します」。

あの日から生まれたもの
大人のための絵本よみやさん
長澤 香



木戸孝子／著
フォルマーレ・ラ・ルーチェ 刊



ティエリ・ルナン／文
オリヴィエ・タレック／絵
岡敦／訳
光村教育図書 刊

私は、2015年12月6日に仙台市地下鉄東西線が開通してから、若林区荒浜地区へ足を運ぶようになりました。訪れるたびに風景が変わる場所に何度も通いたくなる理由は、今は暮らすことができないけれど、そこに集う人たちが、以前広がっていた風景を覚えてくれる人たちがいるからです。

ある日、荒浜で出会った方から、フォトグラファターの木戸孝子さんの写真展「The Unseen」被災地の目に見えない「気配」を教えていただき見に行きました。震災直後の沿岸部の報道写真とは異なる、柔らかなまなざしを感じる作品を目にしたとき、子どもが世界中を見て回り、現実を感じとり、それでもその場所に立とうと決意する

る絵本「いつか、きっと」が思い浮かびました。

絵本の中の子どもは、木戸さんと同じく破壊されたものばかりのガレキの山の中に「壊せない美しいもの」を見たのではないかと考えたからです。

確かにこの場所にいくつもの暮らしがあったと感じる写真は、私が実際に見てきた風景と、教えてもらったかつての風景の間をつないでくれているようです。

これからまだまだ変わっていく風景を、あの日から生まれた人と人、人と場所のつながりを大切に育み、あの日から生まれた命に何が残せるのかを考えながら見続けていきたいと思えます。